市長賞

ともだち

菅沼　美代子

あの海の上を
はつなつのかぜを
心ゆくまであびながら
走った夏を
遠い日のように思い出し
まなうらに　抱きしめるよろこび

いきおいって大事だね
どこまでも泳ぎ切るために
平泳ぎを覚えた
どこにつれていこうとするのか

遠泳ということばが
ひどく安らかなこころもちを運んでくるのに
ひとつまちがえば
はてしもない孤独をつれてくる

はるか沖合の遠いところを見ている
ことばだらけの海を泳いできて
疲れてしまった痩せたほほを
夏の風がともだちのように通りすぎてゆく
ともだちだよ　ずっとずっと
いっしょだよと　すぎてゆく

さみしい雲のかたちに
出会ってしまったときの
おどろきに似て　白い色は
かなしいほどに明るくて
どうしたらつかまえて友達になれるのだろう
考えているといくらでも時間は流れて
雲のいろはたちまちにして変わってゆく

空を走っていた
空と海のあわいを　走っていた

海のひろがりを空気のように
水の肌のきらめきを
うっとりと見ていた

そう　7・1億立方キロメートルの
海の水量って知っている？

遠くからやってくるものに怯えている
3・11
近くに潜んでいる闇の深さに震えている
やさしい小さな列島

むせかえる夏のにおいがする
ともだちなのだけれど
ほんとうは知らない人　と同じ
海という　名前
いっしょに染まった夏
生まれたての夏　青青とした
うつくしい色あいの海にいた